

尾瀬ネットワーク通信

2002年1月24日 VOL.5, No.1(12)

尾瀬自然保護指導員ネットワーク



早春の尾瀬ヶ原 (撮影・高橋 喬)

シカ問題も大切だが 至仏問題はより深刻

ネットワーク(NW)の皆さまには、お健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

早いもので、NWが発足して六年目の春を迎えました。振り返ってみると、いざスタートとなっても、どのようなペースで、どう走っていったらよいのか、正直言って皆目見当もつきませんでした。が、会員の皆さまをはじめ、NWに理解を持つ人々のご協力と励ましに助けられて、初年度からかなりスピードアップをすることができました。ありがとうございました。

入山指導と平行して、初年度から続けてきた活動に「至仏山東面登山道調査」があります。永島担当幹事の調査報告書でも明らかによくに、再開後の東面登山道は現在、見るも無惨な姿

をさらしております。今、尾瀬に対する関心はシカ問題に向けられ、目移りしてしまっていますが、至仏の問題のほうがより深刻で、より緊要な自然保護問題だと指摘する心ある人たちは少なくありません。

そこで調査報告書を叩き台に、「至仏山東面登山道再開鎖要望書(仮称)」をまとめ、三月の幹事会、四月の総会(日時未定)に諮ったうえで、関係方面に提出したいと考えております。皆さまのご賛同、ご協力をいただければ幸いです。

かつて「天上の楽園」と呼ばれたアヤマ平の取り返しつかない現状を見るにつけ、至仏が第一のアヤマ平になることは防がなければならぬと思います。

(高橋 喬)

五年間の調査を振り返って

はじめに

至仏山東面登山道は、植生の保護・登山道の整備・植生復元等の理由で、平成元年より閉鎖されていましたが、平成九年八月二日に九年ぶりに再開されました。

ネットワークでは、平成九年は八月と十月の二回、平成十年と平成十一年は七月にそれぞれ実態調査を実施し、登山道再開における問題点を指摘してきました。さらに、平成十年六月には残雪期の登山道閉鎖期間中（五月中旬～六月末）の利用実態調査も行いました。

至仏山は蛇紋岩という特異な地質により、森林限界は一七〇〇mと低く、「高山

植物の宝庫」としても知られています。至仏山は交通の便も良く折りからの登山ブームと深田久弥の日本百名山の一山としても有名で、年々登山者が増加しています。

このため、登山道を外れて歩く登山者の踏み付けによる植生の破壊や、裸地化の拡大と安易な入山による事故が毎年発生しています。連続五年となる今年の実態調査は節目の年として、東面登山道の他に八月五日はネットワークとして初めて「笠ヶ岳」・「片藤沼」周辺の登山道の状況と植生の状況を調査致しました。

調査日

平成十三年八月三日

(金)～(日)

調査場所

- ・八月四日：至仏山東面登山道（至仏山頂～山の鼻）／雷雨のち曇り
 - ・八月五日：笠ヶ岳・片藤沼／霧のち晴れ
- 調査メンバー
永島勲、松前雅明、本戸信男、長島睦世、宿舎 片品村「一仙」及び「鳩待山荘」

東面登山道の整備状況

今年の調査は、昨年とは逆コースで山の鼻から東面登山道を登り至仏山頂に至るコース設定としました。

鳩待峠を発するころには雨粒が落ちてきて、薄暗い登山道には雷鳴がとどろき、調査は厳しいスタートとなった。

山の鼻から東面登山道を登り始めるとまた激しい雨に襲われた。樹林帯の中へぐぐられた道（場所によっ

ては1m以上も深く掘り下げられている）は、一部ではあるが小ささまざまな石を周りと同じ高さに大量に埋めて、蛇籠の様に金網で覆ってあった。このため、濁流に足を洗われることもなく、昨年と較べると格段に歩き易くなっていた。

東面登山道には、植生の保護や土壌の流失防止用に、金網に石を詰めた「蛇籠」や「板材・丸太」が多数設置されていて土壌の固定化や安定化にある程度効果は認められるが、その効果は限定的である。

高山で急傾斜地という厳しい自然条件下では、雨水等による土壌の流失で登山道がえぐられて岩石の露出したコースを整備するのは並大抵のことではないと痛感した。

植生復元状況

標高一八〇〇mのD地点

に到着のころには、幸いにも雨が上がり尾瀬ヶ原の一部も見渡せるようになってきた。「D地点」下部では丸太や岩で四角に囲まれた僅かな平坦地にはヤチカワズスゲの幼苗に混じって「ミヤマナラ」の実生苗を四株確認できました。葉は淡い緑色で一番大きい苗で高さ10?ほどに育っていた。

笠ヶ岳の登山道及び植生の状況

オヤマザワ田代で至仏山へのコースと分かると急にぬかるみの多い道に変わる。登山道は以前（平成六年七月）と比較すると笹も刈り払われて広くなり非常に歩きやすくなっていた。

小笠の南面に僅かに広がるお花畑の植生は特に荒廃された様子は認められなかった。最後の樹林帯を抜け笠ヶ岳の東肩の草原に出ると展望も利き、お花畑が広がっ

ていた。ニッコウキスゲ・キンコウカ・チングルマ（花穂）などが目立った。笠ヶ岳直下の東面を下ラバーとする登山道は、踏み付けられて道幅は1m程に広がっている所もあった。また、トラバース道へ至るまでの上り坂の登山道の中央部分は深さ20〜30?ほどえぐられ岩石が露出していた所もあった。

笠ヶ岳直下の東面のお花畑をトラバースする登山道はこのまま放置するとやがては、雨水や雪解け水により土壌流失が進行し、至仏山と同様に植生が破壊され岩石の露出した登山道になってしまうであろう。

また、西側の分岐点から山頂へ通じる急斜面の登山道は、その下部のガレ場では崩壊がかなり進み、大小の岩石混じりの砂礫が大量に崩れ落ちていた。この付近が足を取られて一番歩き

にくい場所である。

さらに、この急斜面の登山道の中ほどにある大きな岩石も、大雨の時などには落下する恐れがあるように思われた。登山者はくれぐれも注意が必要である。

この一帯は、原生自然が豊富なため群馬県の「笠ヶ岳西面野生動植物保護地区」（昭和五十一年三月二十五日）に指定されている。このようにまだ豊かな自



（東面登山道D地点を調査する会員）

然が残っている笠ヶ岳は、至仏山と同様、蛇紋岩地特有の高山植物も多く、前述の花の外に目にとまった主なものを挙げるとイブキジャコウソウ、タカネイブキボウフウ、ムラサキタカネアオヤギソウ、ホソバヒナウスユキソウ、ミネウスユキソウなどが観察できた。山頂からは360度の大パノラマが楽しめたが、緑の山並みの中に檜俣タムの白い地肌が異様な光景として目に付いた。

片藤沼は山頂への分岐点からなだらかな下り道を十分ほどで行ける。登山道から南へ10mほどで沼の畔に立てるが、沼の回りへはハイマツや笹のブッシュが濃く近寄れない。当然ながら奥の沼にも行くことは出来ない。当日は天気にも恵まれ静かな湖面には笠ヶ岳が映り、遠くには至仏山と燧ヶ岳が望まれた。いつま

でも大切にしたい貴重な自然が残っていた。片藤沼はまさに雲上の別天地である。

今後の課題と対応

《入山者増加への対応》

尾瀬は誰でも手軽に行けると思われがちであるが、至仏山の標高は2228mで、山の鼻〜至仏山の標高差は830mもあり、れっきとした山岳地域である。

東面登山道は蛇紋岩という硬く滑り易い急傾斜地にコースがあり、スリップや転倒等の事故が多い。植生保護の外に、入山者の事故防止の観点からも、悪天候時には想像を超える危険があることや高齢者や山慣れない人には極めて危険なコースであることを、入山者や観光業者に対してさらなるPRが必要であろう。

《植生復元への対応》

東面登山道は急傾斜地に

加えて蛇紋岩という特殊な条件下にあり、雨水による土壌の流失が著しいが、昨年・今年と降雨時の調査となり、自然の厳しさを思い知らされた。したがって、流失した土壌の回復と流失防止策を十分にとらないと植生復元は極めて困難と思われる。また、笠ヶ岳でも既に登山道沿いの植生の荒廃が始まっている。至仏山の二の舞にならないよう、行政による定期的な調査とそれに基づき保護策の実施が望まれる。

五年の継続調査を振り返ってみると、平成九年の至仏山東面登山道の再開は、入山者を迎え入れることを最優先し、植生の保護及び復元を軽視したものと云わざるを得ないと強く感じました。急傾斜地で裸地化した所は、岩石の露出が年々多くなり、このまま放置して

おくと植生復元は、一層困難になり、回復不可能になる恐れが強い。至仏山東面登山道の通年閉鎖と一刻も早い植生復元への本格的な取り組みを強く訴えたい。

おわりに

今年で五年連続となる至仏山東面登山道の実態調査を通じて感じることは、急斜面で止まることのない土壌の流失と遅々として進まない植生復元作業など、難しい課題が山積しています。

一方、残雪期の登山道閉鎖の継続実行や入山者の減少など明るい動きも見られるが、私達（入山者や全ての関係者）は、この貴重な尾瀬の自然を後世に伝える義務と責任があります。

また、今回初めて調査した笠ヶ岳は山頂東面のお花畑の登山道においては、踏み付けによる登山道の左右

への拡大や裸地化、さらには山頂直下の分岐点から山頂へ通じる急斜面の登山道では登山者によると思われる崩壊がかなり進んでいた。「特別保護地区」並びに「特別天然記念物」の指定を受けている貴重な尾瀬の自然を、これ以上荒廃させてはならない。尾瀬の生態系を保護することを最優先にした抜本的な施策（マイカー規制の強化、東面登山道閉鎖、入山規制等）が、一刻も早く着実に実施されるよう願ってやみません。
調査担当幹事 永島 勲



二〇〇一年度活動報告

群馬側入山指導

第一回 参加者は島上健、深山美子、山本誠剛

七月十二日

群馬、福島の近況について情報交換

七月十四日

早朝五時から四十分、並木駐車場にてアイドリング・ストップ運動。六時五十分から鳩待峠で入山指導開始。八時三十分入山。湿原は団体客多く、ニッコウキスゲ、サワラン、ミスチドリ、トキソウ、クロバナロウゲ、ナガバノモウセンゴケが尾瀬ヶ原の景観を引き立てる。池塘はヒツジグサが多く、オゼコウホネが少ない。久しぶりの人の多さに驚き。道々の自然解説も多数の人に聞いてもらえ、感謝の言

葉をかけてもらえた。意外と団体客に若年層が目立つが、湿原の休憩場下、周辺にゴミ散在、ゴミの持ち帰り運動を知らない世代がいてガツカリ。

七月十五日

島上は昼間、鳩待峠で入山指導。深山、山本はアヤマ平へ。少ない入山者が緑豊かを歓迎。チングルマを見て、アヤマ平では長年に渡り多くの人達が関わり、アヤマ平植生回復に努めたかを解説。

九月十四日

第二回 参加者は田中志朗、西山伸一、坂本敏子、深山美子、大橋文江、山本誠剛
今回のすすめ方について説明

九月十五日

早朝五時三十分から一時間、並木駐車場でアイドリング・ストップ運動。八時から九時半まで鳩待峠で入山指導後、山の鼻へ。自然研究園入り口で自然解説。十三時三十分まで自然研究園を一周し、入山指導と観察会を実施。

九月十六日

野生シカ調査参加者の清水、椎名、佐藤(信)らと合流し、尾瀬口ツジにて調査について打ち合わせを行う。長島(睦)、高橋(喬)とも合流。夜間にシカ調査を実施。
清水、深山、山本は牛首付近にて自然解説を行う。

まとめ

来年度も引き続き、アイドリングストップ運動、尾瀬ヶ原やアヤマ平での自然解説、夜間のシカ調査を継続して行う。

(山本 誠剛)

福島側バス添乗を終えて

二〇〇一年福島県側のバス添乗説明も会員各位のご協力をいただき、無事終了いたしました。五月の第一回目と六月の二回目が45人と人数が少なかったのですが、三回目以降は各回共8～9名、延べ76名に参加していただきました。最終回到一期生の関口(智)さん、森屋さんと二期生の大橋さん、太田さんらの添乗解説デビューもあり、ネットワークの活動メンバーも若返りました。

立て看板設置が大盛況

一回目の活動より立て看板を設置しました。初日より入山者が大勢訪れ、盛況でした。看板及びベンチの設置については国立公園内なのでクレームがつくのではないかと心配もありまし

たが、地元松枝岐村役場施設課長さん、尾瀬御池売店の主任さんの協力のもと、会津バスセント脇にベンチを設置することができました。

テーブル上には7つ道具のリーフレット、アイドリイングストップのチラシとステッカー、そしてゴミ袋にタバコの吸い殻入れ、地図にコンパス等さまざま。中でも人気は「立体地図」です。自分のいる場所さえ知らないハイカーにコースのアップ、ダウンを説明するのに最適でした。

御池の現地案内所を五回設置できたことで活動の一つとして定着しつつあります。バス添乗を苦手としていたために福島側の現地活動に参加されていなかった指導員の方も参加できる新たな場が加わったのではないかと思います。

五月第一回目、大川原裏燧いずれも木道が雪に覆われ、全体的に入山者は少なし。

第二回目、御池に現地案内所開設。同日「尾瀬自然保護指導員福島県連絡協議会」主催による救急救命講習会に4名参加、南会津広域消防組合担当者より講習を受ける。

第三回目、現地研修会も実施。帝釈山、田代山、時期は少しずれたがオサバグサの大群落は見事でした。第四回目、夏休みに入り、入山者増加。午前八時前に御池駐車場満車。

第五回目、秋季には花も少なくなり、植物の説明等を少なくし、アイドリイングストップについての説明を積極的にした。帰りのバスなどでも説明する。

第六回目、御池ネットワイク案内所で女性二名のケガ

人の手助け、また裏燧横田代付近で左足首骨折の男性の救出、そして案内所での救急車が来るまでの間に坂本指導員がテーピング処理、無事救急隊にタッチする。二回目の救命講習が即実践できるとは思ってもいませんでした。

二〇〇二年も「尾瀬が尾瀬でありますように」皆さまのご協力をお願いいたします。

(磯部 義孝)

原稿募集

「ネットワーク通信」は尾瀬ネット会員の意見の交換の場となるよう発行しておりますので、皆さんの投稿をお待ちしております。事務局宛に送ってください。

一行十二字詰め、ワープロ、手書き、いずれでも結構です。短信はハガキでも可。封書の場合、「原稿」と朱書きしてください。

原稿に付随した写真掲載を希望される方はできる限りネガを一同封ください。ネガは後日返却いたします。

電子メールでの投稿も歓迎いたします。電子メールでの投稿先は左記のメールアドレスで受け付けます。

(若松 真)

尾瀬自然保護指導員

ネットワーク

〒100-0014

東京都千代田区永田町

二の一七の五の二〇三

(株)SEC内

電話 03-3581-0321

FAX 03-3581-2178

代表幹事 高橋 喬

事務局長 椎名 宏子

編集幹事 若松 真